

# BIRD RESEARCH NEWS

## 2015年6月号 Vol. 12 No. 6

活動報告 20年で分布を拡げた鳥 ～繁殖分布調査～

活動報告 ID-BIRD try 第8回 富士山

お知らせ 調査研究支援プロジェクト成果報告会

イベント カワウとミミヒメウ 国際シンポジウム開催

生態図鑑 キビタキ

論文紹介 ナツツを振って重さを確かめるメキシコカケス

お知らせ 日本鳥学会2015年度大会 in神戸

活動報告 季節前線シギチドリ

Photo by Yoshiro Watanabe



## 活動報告

### 20年で分布を拡げた鳥

～繁殖分布調査からわかること～

植田睦之

日本野鳥の会, 日本自然保護協会, 日本鳥類標識協会, 山階鳥類研究所, 環境省生物多様性センターとの共同事業として来年から調査が開始される「全国鳥類繁殖分布調査」。この調査を行うことで、どんなことがわかってくるのでしょうか? 今回は、1970年代と1990年代に行なわれた過去2回の調査結果の比較からみえてきた、暖かい地域に分布を拡げている鳥と、寒い地域に分布を拡げている鳥についてご紹介します。

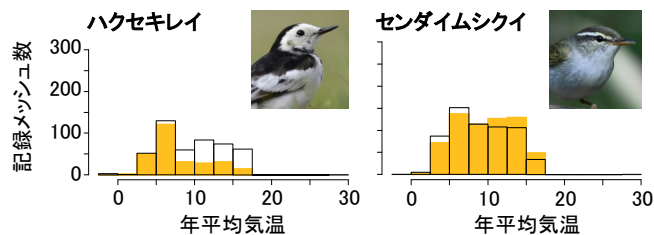


図. ■が1970年代, □が1990年代に繁殖が確認されたメッシュ数。ハクセキレイは、気温が低い地域ではあまり違いがみられないが、気温が高い地域では90年代の方が記録メッシュ数が多く、分布が拡大している。センダイムシクイは、年平均気温が7.5~10°Cの地域を境に、より寒いところでは分布を拡大し、暖かいところでは縮小している。

Photos by 三木敏史

### 暖かい地域で分布を拡げた鳥

暖かい地域で分布を拡げた鳥には大きく分けると2つのパターンがみられました。一つは北方系の鳥が暖かい地域に分布を拡げていったパターンです。このタイプの鳥としてはハクセキレイがよく知られていますが、今回の比較結果にもそれが反映されていました。また、ハシボソガラス、アオジなどもこのパターンに該当しそうです。もう一つは南方系の鳥が、暖かい地域でさらに分布を拡げ、寒い地域では分布を縮小させているパターンです。ホトギスやサンコウチョウがこれにあたります。

### 寒い地域で分布を拡げた鳥

こちら南方系の鳥が、寒い地域へと分布を拡げているパターンがありました。ヒヨドリがこれにあたります。同じく南方系のメジロやヤマガラも分布を拡げているのですが、これらの鳥は気温に関わらず全体的に分布を拡げていて、特に「寒い地域で」というわけではありませんでした。また、センダイムシクイ、コマドリ、オオルリといった夏鳥は寒い地域で増えているようでした。これがなぜなのかは、よくわかりません。

前回の調査から20年経った今、分布はさらに変化していると思います。来年からの調査で、それらを明らかにしていきたいと思います。



### ニュースレターを発行しました

「全国鳥類繁殖分布調査」のニュースレターを発行しました。右記からどなたでもご覧いただくことができます。また参加登録していただいた方には、発行されるたびにお送りします。参加登録がまだの方は、ぜひご登録ください。

ニュースレター 創刊号

<http://www.bird-atlas.jp/news/banews01.pdf>

参加登録のページ

<http://www.bird-atlas.jp/volunteer.html>



# 活動報告

## ID-BIRD try 第8回

### 富士山で山の鳥を調査しました！

高木憲太郎・守屋年史・小島みずき

さまざまな環境で野外実習を行ない、各種の識別や調査方法を体験していただく「ID-BIRD try」第8回を6月最初の土日に1泊2日で実施しました。場所は、富士山の東斜面、探鳥会発祥の地でもある須走を起点とするふじあざみラインです。このふじあざみラインは、ふもと側の標高が約1000m、一番上の須走口五合目の標高が約2000mなので、下から上まで1000mの標高差があります。標高ごとに気温や植生が変化し、それに伴って鳥類相が異なるので、その違いを調べてみようというのが今回の狙いです。森林環境になるので、今回の識別の主力は、目ではなく耳です。小鳥たちのさえずりを覚えて聞き分けることや、スポットセンサスのテクニックを学んでもらうことも目的の一つでした。

今回は学生が多く参加しており、参加者は20名でした。せっかくなので、富士山に来たことを実感してもらおうと、車で5合目に集合したのですが・・・、霧がたちこめ、山頂どころか100m先の視界も怪しい始末。企画倒れでした。参加者の皆さん、すみませんでした。この日は、ルリビタキやビンズイ、メボソムシクイなどの声を聞いて、少しスポットセンサスの練習をして下山しました。

夜は宿舎で座学です。共同開催団体のLASP富士山鳥類調査研究グループの森本元さんを講師に、須走口の鳥たちが標高や環境によってどうすみ分けているのかを学びました。適した環境さえあれば標高2000mあたりでもヒバリがさえずっていることなど、ちょっとした雑学も交えながらお話いただきました。



写真1. 霧の中のスポットセンサスの練習。

翌朝は、未明から行動開始です！日の出前にいっせいに鳴きだす小鳥たちのさえずりを楽しんでもらった後、4時半から調査を開始しました。4名ずつ6班に分かれて、ふじあざみラインの上から下まで18か所でスポットセンサスを行ないました。スポットセンサスでは、調査者から一定の範囲内にいる鳥の数をかぞえます。そのため、鳴き声の主がどれくらいの距離にいるのか推定する必要があります。また

複数の鳥が同時に鳴いている時は、何羽の鳥がいるのかも判断しなければいけません。ちょっと難しいところもあったかと思いますが、今回の体験が、観察から調査へ、一歩踏み出す機会になればと思います。

3時間の調査を終えたら、次は調査結果のまとめです。主要な鳥について、どの標高で記録されたのか、各班から報告してもらい、その場でグラフを作っていきます。ルリビタキのように1700m以上でしか記録されない鳥がいる一方で、キビタキのように上から下までいる鳥もいました(図)。小鳥たちのさえずりが活発な時間帯は朝に限られます。ひとりでは、1000mの標高差を一度に調査することはできませんが、みんなで調査すると1日だけの調査でも多くの発見があります。

最後に梨ヶ原の自衛隊演習地でノビタキやホオアカ、コヨシキリなどの高原の鳥を観察して帰路につきました。



写真2. 梨ヶ原でバードウォッチング

今回の調査で、自分で調べて「わかる」ことの楽しさを感じてもらえたかな、という手応えが参加者から伝わってきたことが、何より嬉しかったです。今回は座学と現地実習を組み合わせ初めの試みでもあり、いたらぬところもあったかと思いますが、今回の経験を次に活かしていきたいと思えます。天候が思わしくないなか、ご参加いただいた皆さまに感謝いたします。

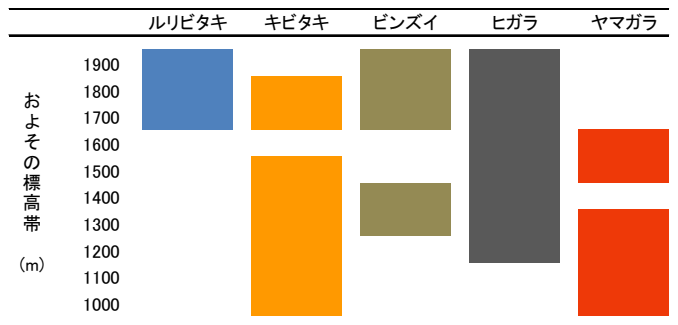


図. 調査によって得られた結果の一部。鳥によって観察された標高が異なる。 Photo by 川崎慎二(ルリビタキ), 長嶋博之(キビタキ), 浦島淳吉(ビンズイ), 三木敏史(ヒガラ, ヤマガラ)

## お知らせ

調査研究支援プロジェクト成果報告会  
北海道のヨタカの分布と生息数に迫る

高木憲太郎

調査研究支援プロジェクトにいつも温かいご支援をお寄せいただき、ありがとうございます。2011年度から2013年度まで、3年分の調査研究プランの成果が集まったことをふまえ、7月11日(土)に品川にて成果報告会を開催し、優秀な成果をあげられた方にバードリサーチ賞を授与して表彰することにいたしました。

今回、バードリサーチ賞の授与が決定した「プレイバック法を用いた北海道のヨタカの広域分布調査」の実施者である河村和洋さんは、北海道全土を巡ってヨタカの生息状況を調査し、環境要因とつき合せ、北海道でなわばりを形成するオスの個体数を約8万羽と推定しました。成果報告会では、ヨタカの生態などの解説を交えながら、研究成果についてお話しいただく予定です。ぜひご参加ください。

なお、この成果報告会の開催には、株式会社モンベルにご協賛いただき、会場および副賞をご提供いただいております。

バードリサーチ調査研究支援プロジェクト成果報告会2015

## ヨタカ

～夜行性鳥類の分布と生息数に迫る 北海道での挑戦～

日時: 7月11日(土)14:30~17:00

場所: モンベル品川店2Fサロン(品川駅高輪口徒歩5分)

## 内容:

2011年度~2013年度の調査研究の成果報告

バードリサーチ賞 受賞講演

「プレイバック法を用いた北海道のヨタカの広域分布調査」

河村和洋氏

ほか

## 参加費:

一般	1000円
バードリサーチ会員	500円
モンベル会員	500円

## 懇親会:

18:00~(品川駅周辺で3000円~4000円を予定)



プログラム詳細および参加申し込みはこちらから

[http://www.bird-research.jp/1\\_event/aid/seika2015.html](http://www.bird-research.jp/1_event/aid/seika2015.html)

## イベント情報

## カワウとミミヒメウ

## 国際シンポジウムを開催します!

高木憲太郎・加藤ななえ・熊田那央

カワウはユーラシア大陸やアフリカ大陸に広く分布しており、カワウと内水面漁業の軋轢は、日本だけでなく海外でも生じています。ヨーロッパでは、国境を越



えて渡るカワウに対応するために、多国間で連携した取り組みが進んでいます。またアメリカでは、カワウの近縁種であるミミヒメウで同様の問題が起きており、モニタリング調査や各種の研究、管理の取り組みなどが進められています。

こうした海外でのウ類の取り組みについて、環境省主催の国際シンポジウムが開催されることになりました。イギリスとアメリカから研究者を招聘し、各国の現状や管理についてお話しいただきます。このシンポジウムは、滋賀県と滋賀県立琵琶湖博物館のご協力のもと、バードリサーチが運営を行います。海外のウ類の研究について、じっくり話を聞ける機会はなかなかありません。英語の講演には通訳がつきます。ぜひ、お気軽にご参加ください。

国際シンポジウム

## カワウとのつきあい方

～アメリカ・ヨーロッパの取り組みから考えるウの管理～

場所: 滋賀県立琵琶湖博物館

滋賀県草津市下物町1091

日時: 2015年7月25日(土)13時~17時(予定)

## ■テーマ1 歴史的変遷と管理のあり方

亀田佳代子(琵琶湖博物館)

「日本におけるカワウ保護管理の現状と課題」

Linda R. Wires(アメリカ合衆国魚類野生生物局)

「アメリカ中央部のミミヒメウ管理の歴史的変遷と課題」

## ■テーマ2 被害対策と個体群管理

坪井潤一(水産総合研究センター)

「日本の内水面漁業における被害と対策」

Daniel D. Roby(オレゴン州立大学)

「アメリカ西部のミミヒメウ管理の最前線」

## ■テーマ3 情報共有と広域連携

山本麻希(長岡技術科学大学)

「地域と広域 カワウ個体群管理の考え方」

David N. Carss(英国生態学水文学研究センター)

「ヨーロッパのカワウ管理システムと体制」

参加申し込みはこちらから

[http://www.bird-research.jp/1\\_katsudo/kawau/sympo.html](http://www.bird-research.jp/1_katsudo/kawau/sympo.html)



# キビタキ 英:Narcissus Flycatcher 学:Ficedula narcissina

## 1. 分類と形態

分類: スズメ目 ヒタキ科

全長: 120~135mm  
 自然翼長: ♂ 75.94±1.93mm ♀ 70.72±1.89mm  
 全嘴峰長: ♂ 14.41±0.64mm ♀ 14.53±0.70mm  
 ふんばり長: ♂ 16.30±0.45mm ♀ 16.39±0.38mm  
 尾長: ♂ 50.90±1.54mm ♀ 46.39±1.67mm  
 体重: ♂ 14.87±0.85g ♀ 16.09±1.10g

※著者による測定値。

### 羽色:

亜種キビタキ *F. n. narcissina* のオスは頭上から背、尾羽、翼羽が純黒色であり、雨覆と三列風切に白色斑を持つ。腰は黄色。喉から腹にかけては橙黄色から黄色であり、下尾筒周辺は多くの個体で白色。メスは上面が茶褐色であり、体下面は汚白色から淡褐色。第一回夏羽の若鳥では摩耗した旧羽が混じることで雄雌ともに齢を査定できる。



写真1. キビタキのオス。  
Photo by 小野安行



写真2. 第一回夏羽オス。

亜種リュウキュウキビタキ *F. n. owstoni* のオスは喉が赤みのない黄色であり、上面が緑色がかかる。メスも上面の緑色みが強い傾向にある。

### 鳴き声:

ティーチュ、チュリリリ、と澄んだ声で鳴くほか、ツクツクボウンやコジュケイに似た声を出す。個体ごとに鳴き声が異なるが、他の生物の音声を学習することによって獲得した声であるかは不明である。警戒声は他のヒタキ類に似たヒッヒッという声を出す。威嚇の際はブンブン鳴く。

## 2. 分布と生息環境

### 分布:

亜種キビタキは夏鳥として全国に広く分布しており、樺太、国後島から九州で繁殖する。冬はフィリピンやボルネオなどに渡るとされるが、詳細な越冬地は分かっていない (Kennedy *et al.* 2000)。琉球列島で越冬しているという報告もあるが (日本鳥学会 2012)、詳細は不明である。オーストラリア西部やアリューシャン列島でも観察記録がある (Higgins *et al.* 2006)。

南西諸島には亜種リュウキュウキビタキが生息する。屋久島やトカラ列島の個体は夏鳥だと考えられており、越冬地は不明である。奄美諸島や琉球諸島の個体群は留鳥だと考えられている (日本鳥学会 2012)。

### 生息環境:

亜種キビタキは標高1800m以下の落葉広葉樹林、針広混交林、常緑針葉樹林、照葉樹林、カラマツ林、農耕地、住宅地、モウソウチク林など、多様な環境で繁殖する。渡りの途中には都市公園で観察されることも多い (中村・中村 1995, 藤巻 2007, 井上 2014)。亜種リュウキュウキビタキは広葉樹林帯、照葉樹林やマングローブ林に生息する。

## 3. 生活史

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月

### 繁殖システム:

越冬期 渡り 繁殖期 渡り

日本では4月上旬から5月上旬にオスが渡来し、少し遅れてメスが渡来する。縄張りにメスがやってくるとオスはディスプレイフライトとダンスで迎える (岡久 (2014) の動画参照)。

一夫一妻で繁殖し、雌雄で巣場所を決め、メスが造巢、抱卵する。オスは繁殖期間を通して縄張りを防衛し、面積はおおよそ1.13 haである (Okahisa 2014)。巣にいるメスにオスが給餌することはほとんどない。卵が孵化すると、雄雌でヒナへ給餌する。

オスは帰還率が高く、毎年同じ場所に縄張りを形成するが、メスは分散し、同じ場所に戻ることはほとんどない。

### 巣の位置、形と材質、大きさ:

キツツキの古巣、自然樹洞、折れた木や枝の先端、枝の基部のくぼみ、折れた竹、廃屋の屋根など、さまざまな場所に営巣する (清棲 1978, Okahisa *et al.* 2012, Nechaev 1984, 井上 2014)。巣の高さは0.5m~20mまで様々である。巣箱は前面を広く開けたものやシジュウカラ用のものなどを利用する。



写真3. 樹洞の巣で抱卵するメス。

巣材は主に落ち葉、コケ、樹皮、植物の繊維、根状菌糸束、動物の毛を利用してカップ型の巣をつくる。落ち葉を敷き詰めた上に産座を造るのが一般的だが、落ち葉ではなくコケばかりを敷き詰める個体もある。産座は直径6.50±0.37cm、深さは3.24±0.71cm (Okahisa *et al.* 2012)。

### 一腹卵数、卵サイズ、卵色:

一腹卵数は3~6卵。卵はわずかに青みがかかった白色で、褐色斑が入ることが多い (Okahisa 2014)。大きさは長径18mm、短径14mm、重さ1.5~2.0g (清棲 1978)。



写真4. 卵。

### 抱卵・育雛期間、巣立ち率:

抱卵期間は10~13日、育雛期間は10~16日である (Nechaev 1984)。富士山における卵の孵化率は96.8%、巣立ち率は73%程度である (Okahisa 2014)。地域によっては巣立ち率が30%を下回ることもある (Nechaev 1984)。



写真5. ヒナ

### その他:

秋にカラ類やカラフトムシクイ、コサメビタキと混群を形成することがある (Nechaev 1984)。

## 4. 食性と採餌行動

キビタキは昆虫などの無脊椎動物を採餌するほか、秋には様々な果実を採食する。フライキャッチャーの一種とされるものの、実際には、飛翔している昆虫を食べることは少なく、枝葉についた虫に飛びつくか摘み取るのが主である(Nechaev 1984, 清棲1978, Murakami 1998, 2002, 岡久ほか 2012)。地上で昆虫を捕る姿も観察されており(清棲1978)、特に鱗翅目の幼虫が地上に降りる時期には地上採餌が多く観察される(Murakami 1998, 2002)。

採餌行動には性差があり、オスはソングポストの周辺でつばみ採餌するのに対して、メスは巣の周辺でホバリングや飛びつきで葉についた餌をとる。また採食方法は季節によって変化する(岡久ほか 2012)。

## 5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

### ● 若いオスの模様の個体差



写真6. 第一回夏羽のオス。左の個体はかなり成鳥に近い羽色になっているのに対して、右の個体は黒い羽毛がほとんどなく、黄色い部分も少ない。

キビタキのオスの第一回夏羽の色は個体によって異なっており、上面に黒色を持たないものから、黒色が混ざるもの、ほとんど成鳥と見分けがつかないものまで様々である。こうした羽色の個体差は越冬地での換羽の程度によって生じると考えられているが、何故このような個体差がキビタキで見られるのかは定かではない。

日本における研究では、越冬地で多くの羽を換羽した黒色の個体は体重が軽く、一方あまり換羽していない褐色の個体は体重が重い傾向にあることが分かってきた。若い個体にとって黒い羽を身にまとう事は換羽のためのエネルギー消費といった不利益があると考えられ(Okahisa *et al.* 2013)、渡りを困難にしている可能性がある。また繁殖地においては、褐色の割合が高い個体ほど攻撃性が低く、激しいオス間闘争を回避する傾向にあることが分かっている(Okahisa 2014)。

### ● 個体数の変化

1990年代後半は全国的に夏鳥が減少し、東日本を中心に亜種キビタキの減少も報告されている。ところが2000年代に入ると、キビタキの個体数が増えているという声が全国的に聞かれるようになった。なかでも山口県では、1980年代後半から2000年までに繁殖分布が6.1倍に増加した(日本野鳥の会山口県支部 2008)。

個体数の増加の原因は定かではないが、キビタキは主として枯死木にある入り口の広い半開放性樹洞を利用して繁殖し(Okahisa *et al.* 2012)、こうした樹洞は管理された植

林地では少ないこと(Kikuchi *et al.* 2013)から、林業の衰退や里山の放棄によってキビタキに適した営巣環境が増えたことが要因のひとつであると推測される。実際、放棄竹林が営巣環境として利用されることで、西日本において新たな繁殖地が成立した可能性がある(井上 2014)。

## 6. 引用・参考文献

- 藤巻裕蔵. 2007. 北海道中部・南東部におけるキビタキとオオルリの繁殖期の生息状況. *Strix* 25: 17-26.
- Higgins, P.J., J.M. Peter & S.J. Cowling. (Eds.), 2006. *The Handbook of Australian, New Zealand & Antarctic Birds. Vol. 7: Broadbill to Starlings.* Oxford University Press, Melbourne.
- 井上賢三郎. 2014. モウソウチクで繁殖するキビタキ. *Strix* 30: 141-148.
- Kennedy, R., Gonzales, P.C., Dickinson, E.C., Miranda, H. & Fisher, T.H. 2000. *A guide to the birds of the Philippines.* Oxford University Press, New York.
- Kikuchi, K., Akasaka, T., Yamaura, Y. & Nakamura, F. 2013. Abundance and use of cavity trees at the tree- and stand-levels in natural and plantation forests in Hokkaido, Japan. *J. For. Res.* 18: 389-397.
- Murakami, M. 1998. Foraging habitat shift in the narcissus flycatcher, *Ficedula narcissina*, due to the response of herbivorous insects to the strengthening defenses of canopy trees. *Ecol. Res.* 13: 73-82.
- Murakami, M. 2002. Foraging mode shifts of four insectivorous bird species under temporally varying resource distribution in a Japanese deciduous forest. *Ornithol. Sci.* 1: 63-69.
- 中村登流・中村雅彦. 1995 原色日本野鳥生態図鑑 陸長編. 保育社, 東京.
- 日本鳥学会. 2012. 日本産鳥類目録改訂第7版. 日本鳥学会, 三田.
- バードリサーチ. キビタキ・ガビチョウ鳴きまね調査 ([http://www.bird-research.jp/1\\_katsudo/kibitaki/manebunpu.html](http://www.bird-research.jp/1_katsudo/kibitaki/manebunpu.html))
- 日本野鳥の会山口県支部. 2008. 山口版鳥類繁殖分布調査報告書2000. 日本野鳥の会山口県支部, 山口.
- 清棲幸保. 1978. 日本鳥類大図鑑1. 講談社, 東京.
- Nechaev, V. A. 1984. Narcissus Flycatcher *Ficedula narcissina* Temm. Of Sachalin Island (distribution and biology). *Faunistics and Biology of Birds in the South Far East* pp. 87-95. [藤巻裕蔵(訳). 1990. サハリンのキビタキ(分布と生態). 極東の鳥類 4: 92-98].
- 岡久雄二. 2014. キビタキの求愛ディスプレイ 動物行動の映像データベース momo140506fn01b (<http://zoo2.zool.kyoto-u.ac.jp/ethol/showdetail.php?movieid=momo140506fn01b>).
- Okahisa, Y. 2014. Plumage colour function in the Narcissus Flycatcher *Ficedula narcissina*. Ph.D. thesis. Rikkyo university, Tokyo.
- 岡久雄二・小西広視・高木憲太郎・森本元. 2011. キビタキ *Ficedula narcissina* の雄の齢査定法の検討. *日本鳥類標識協会誌* 23: 12-18.
- 岡久雄二・森本元・高木憲太郎. 2012. キビタキ *Ficedula narcissina* の採餌行動の性差. *日本鳥学会誌* 60: 91-99.
- Okahisa, Y., Morimoto, G., Takagi K., & Ueda, K. 2013. Effect of pre-breeding moult on arrival condition of yearling male Narcissus Flycatchers *Ficedula narcissina*. *Bird study* 60:140-144.
- Okahisa, Y., Morimoto, G., & Takagi K. 2012. The nest sites and nest characteristics of Narcissus Flycatchers *Ficedula narcissina*. *Ornithol. Sci.* 11: 87-94.

## 執筆者

岡久雄二 自然環境研究センター

キビタキはバードウォッチャーにはとても人気な鳥である。それにもかかわらず基本的な生態さえも研究されていなかった。富士山の山林で7年間キビタキの研究を行



調査風景. 真ん中が著者.

なってきた結果、本稿で紹介させていただいたように少しずつキビタキの生態は明らかとなりつつある。

近年都市部にも進出中のキビタキは近い将来さらに身近な鳥になると思われる。未だ繁殖地や越冬地の分布も定かでないキビタキだからこそ、研究の可能性は無尽大だるう。





## 活動報告

## 季節前線シギチドリ

## 今年は北海道を駆け足で通過

守屋年史

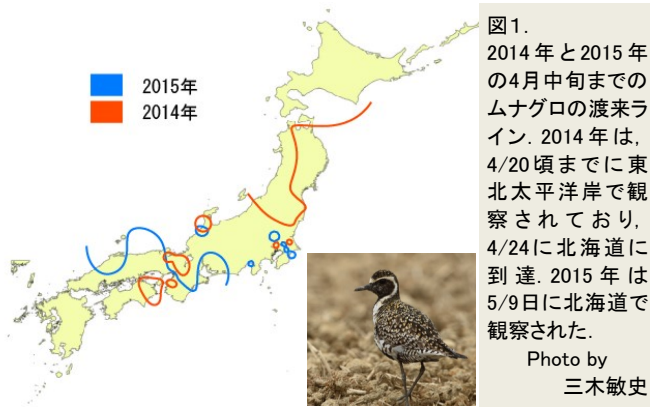
今年の春も季節前線シギチドリの対象種の初認情報を募集しました。今年度は、63名の個人・団体から情報を提供していただきました。ご協力ありがとうございました。

寄せていただいた情報から、「よく行く場所の初認記録」を中心に、今年の結果と昨年の結果を比較しながらみてみました。

## 本州でのんびりしていた？ムナグロ

早春に観察されるメダイチドリは、2014年、2015年ともに4月初旬に東北地方まで観察されています。北海道南西部への到達も、2014年は4/24、2015年は4/23と両年とも同じぐらいでした。

ムナグロは、本州太平洋側で4月初旬から報告され始めましたが、東北以北への渡来が遅く、北海道への到達は5/9で昨年よりも2週間遅い結果となっています(図1)。後述しますが、シギ・チドリの移動が早かったと考えられる今年の渡りで、ムナグロだけは北上が遅い結果となりました。原因は不明ですが、ムナグロは春期に農耕地に集結して渡っていきます。干潟とはまた異なった理由があるのかもしれませんが。



## 多くの種が足早に通り過ぎた

キョウジョシギは4月の中旬頃から報告があり、東北までの到達は2014年と変わりませんでした。北海道への到達は4日遅れましたが、オホーツク海側では昨年より10日ほど早く観察されています。トウネンも同様で、東北までの初認は昨年とほぼ同時期、北海道への到達は2日遅く、オホーツク海側での観察は4日ほど早い結果となっています。



チュウシヤクシギ、キアシシギは春期の渡りの終盤に観察され始めます。チュウシヤクシギの全国で最も早い報告は2012年が4/15、2013年が4/11、2014年が4/9と年々早まっており、2015年は4/5でした。北海道への到達は4/25で昨年と同じですが、オホーツク海側での観察は昨年より8日早い5/11になっています(図2)。キアシシギは、2012年以降、4月の15～20日に初報告がありましたが、今年は4/12に東北で報告されました。北海道での初認はオホーツク海側で、昨年より6日早い4/30となっています。昨年に比べると、北海道の太平洋側からオホーツク海側への移動が早まった種が多いようです。

今年から対象種に含めたオオソリハシシギは、3月下旬には九州、山口、宮城で報告され、5/11に北海道で報告されました。本州以南には早く渡来するようですが北海道への渡来は遅く、中継地で長逗留するのかもしれない。

## 今年は4月下旬から好天続き

シギ・チドリの渡りは、彼らが日本を通過する4月～5月の間の天候に左右されると考えられます。今年は4月上中旬に暖かく湿った空気が流れ込み、不安定な天候でしたが、下旬は好天が多く、北日本を中心に日照時間がかなり長くなりました。5月も引き続き日照時間が長く、1946年の統計開始以来5月の最長記録を更新しています。また、4～5月の気温は総じて平年より高く、北・東日本では、月平均気温が観測史上最も高い値を更新した観測地点が55箇所もありました(気象庁:平成27年報道発表資料)。このように今年は気温が高く好天だったために、種によっては中継地での滞在が短かく、滞留する鳥達が少なかった可能性があります。そのため、一度に観察される最大個体数は昨年に比べて減少しているのかもしれない。夏頃には、モニタリングサイト1000シギチドリ類調査の春期のシギチドリの個体数の報告がおこなわれますので、上記のような状況を踏まえて考察していきたいと考えています。

水鳥の初認調査は、観察者が水際に行く必要があることがネックで、毎日の観察が難しいのが現状です。しかしそれでも、水辺をマイフィールドにされている方々の報告により、水辺の渡り鳥の移動が分かってきています。今後ともご協力よろしくお願いいたします。

バードリサーチニュース 2015年6月号 Vol.12 No.6

2015年6月30日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ  
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9  
TEL & FAX 042-401-8661  
E-mail: br@bird-research.jp URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之 編集者: 青山夕貴子・高木憲太郎

表紙の写真: タシギ